

2022年6月5日（日）「神の聖」

使徒 5:1-11

1 ところが、アナニアと言う人は、妻のサフィラと相談して財産を売り、2 妻も承知のうえで、代金の一部を取っておき、その残りを持って来て使徒たちの足元に置いた。3 すると、ペトロは言った。「アナニア、なぜ、あなたはサタンに心を奪われ、聖霊を欺いて、土地の代金の一部を取っておいたのか。4 売らないでおけば、あなたのものだったし、また、売っても、その代金は自分の思いどおりになったではないか。どうして、こんなことをする気になったのか。あなたは人間を欺いたのではなく、神を欺いたのだ。」5 この言葉を聞くと、アナニアは倒れて息が絶えた。そのことを耳にした人々は皆、非常に恐れた。6 若者たちが立ち上がって死体を包み、運び出して葬った。

7 それから三時間ほどたって、アナニアの妻がこの出来事を知らずに入ってきた。8 ペトロは彼女に話しかけた。「あなたがたは、あの土地をこの値段で売ったのか。言いなさい。」彼女は、「はい、その値段です」と答えた。9 ペトロは言った。「二人で示し合わせて、主の霊を試すとは、何としたことか。見なさい。あなたの夫を葬りに行った人たちが、もう戸口まで来ている。今度はあなたを担ぎ出すだろう。」10 すると、彼女はたちまちペトロの足元に倒れ、息が絶えた。若者たちは入って来て、彼女の死んでいるのを見ると、担ぎ出し、夫のそばに葬った。11 教会全体とこれを聞いた人は皆、非常に恐れた。

【序論】

ペンテコステの機会を用いて、毎年少しずつ使徒言行録からの説教を続けております。2000年以上前にキリスト者の群の中で起きた「聖霊降臨」という出来事を記念し、現代に生きる私たちの内にも同様の聖霊の満たしが起きることを信じ、また私たちの全生活が聖霊の導きの下に置かれることを願いつつ、「ペンテコステ礼拝」を守っているのです。本書全体が、聖霊に満ち溢れた教会の姿、聖霊が働かれるときに起きてくる事柄を明らかにしています。聖霊とはどういうお方であるかを知りたければ、使徒言行録を読めばいいのです。読むに当たって、私たちはこれを「人間の業」としてではなく「聖霊の御業」として読む。今年は5章に差し掛かりましたが、ここには聖霊の「聖さ」にふれてしまった一組の夫婦の話が出てきます。これは読者を震撼させるストーリーであり、安穩と信仰生活を送っている者の心を激しく揺り動かすものです。私自身も長年恐れを抱きながらこの箇所を読んできましたが、いつかは説教で扱わなくてはならない日が来るだろうと思っていました。

【本論】

本論 1. 夫婦の献金の動機

ここに登場する夫婦の名前は「アナニア」と「サフィラ」。私は口語訳を読んでいた頃から「アナニヤとサッピラ」という呼び方に馴染んできましたので、今日はそのように呼ばせていただきます。「アナニヤ」とは「主は憐れみ深い」という意味、「サッピラ」とは「美しい」という意味の名前です。ユダヤの伝統的な名前を付けてもらったのでしょう。そして、彼らも主イエスを知り、福音を信じ、キリスト者となって、教会に属するようになりました。

初代教会が大変貧しく、ユダヤ当局の監視下にあつて、食べ物にも窮する状況であったことは、過去に学んだ通りです。だから彼らは自分たちの財産を持ち寄り、「すべてを共有していた」(4:32)。そして、「信者の中には、一人も貧しい人がいなかった」(4:34a)と、まことに幸いな愛の共同体がそこに造り上げられていました。「土地や家を持っている人が皆、それを売っては代金を持ち寄り、使徒たちの足元に置き、必要に応じて、おのおのに分配された」(4:34b-35)とあるように、彼らは余裕のある不動産を売却して、貧しい信徒を支えたというのです。現在の日本円で考えると、何千万円という規模になったのでしょうか。その中でもバルナバの献げ物は群を抜いていたようです。周りの人々が驚くような寛大な心がそこに示されました(4:36-37)。

さて、私は一牧師として、この献金のあり方にやや懸念を持たずにはられません。「足元に置いた」という、誰の目にも見える形でこの献金がささげられていたところに、アナニヤ・サッピラ夫妻の悲劇が生じたと思われるからです。誰の目にも分からない形であったならば、神様と献金者だけの関係が成り立っていたのではないのでしょうか。バルナバの行為は純粋な動機から出ていたと思われませんが、それが結果として多くの人の賞賛を得るものとなってしまったのです。そこにサタンがつけ込みました。

アナニヤ・サッピラ夫妻は、陰でヒソヒソ囁かれるバルナバ賞賛の声が耳につき、ライバル心を燃やしてしまったのでしょう。夫婦で話し合い、自分たちにもバルナバに劣らぬ献げ物ができることを示すため、大切な財産を売って資金を作りました。元々その財産は彼らのものであり、それを売却することに問題があったのではありません。また、献金は強いられたものではなく、あくまでも彼ら自身の思いから出てきたものです。では、何が問題だったのか。それは、彼らが共謀して金額を偽った点です。アナニヤは使徒の足元に献金を携えてやって来て、「私たちも土地を売ってお金をつくってきました。これがそのすべてです」などと言ってささげたのでしょう。しかし、それは「すべて」

ではなく「一部」であった。9割であったか8割であったかは分かりません。彼らは一部を自分たちのために残した。そうであるならそうと言えよよかったです。しかし、彼らは夫婦で心を合わせて偽りを語ってしまった。これが罪と見なされたのです。

私たちも、気をつけなくては、いつしか教会会計の数字ばかりを気にしているかもしれません。財政状況が厳しいところに大きな献げ物があったら、それは共同体の力になりますからまことに感謝なこと。しかし、私たちは同時に、神様が献金者一人ひとりの「心」を見られる方であることを忘れてはなりません。主イエスもレプタ銅貨2枚をささげたやもめの心を見て喜ばれました（ルカ 21:1-4）。やもめのわずかな献金が、エルサレム神殿に対してどれだけの貢献をしたかということは問題ではなかった。献金をするとき、私たちは聖なる神と一対一で向き合っているということを忘れてはなりません。

本論2. 聖霊を欺くことはできない

しばらく前の「聖書の学びと祈りの集い」で「聖霊論」を学びました。その中で、聖霊とは、父なる神、子なる神と同格であり、三者の間に優劣はないということが語られていました（ハイデルベルク信仰問答問 53）。聖霊も他ならぬ神ご自身である。今日の箇所は、そのことを明確に教えてくれています。3節で「聖霊を欺いた」と言われているところが、4節では「神を欺いた」と言い換えられているのです。このところからも、聖霊とは神ご自身であるということが確認できるでしょう。では、神とはどういうお方であったか。根本的属性として、「独自」「霊」「不変」「永遠」「単一」「遍在」「全能」「全知」という要素が挙げられます（基本聖句集）。神にとって知り得ぬ事柄は存在せず、人の心の思い、歴史の裏側までも知り尽くしておられる方である。この方の御前に私たちの心を表していくのが献金であり、そこでは真実な心が問われている厳粛な時間があります。

今日の箇所は読者にひとかたならぬ恐れを抱かせるものであり、私も最初の段階でいろいろな疑問が湧いてきました。

- ・ アナニヤ・サツピラ夫妻はキリスト者であるのになぜ裁かれたのか？
- ・ 彼らの魂はどのように扱われたのか？
- ・ 現代の教会でも同様のことが起こりうるのか？
- ・ 裁きが厳しすぎるとは言えないだろうか？

これらすべての疑問に簡単に答えることはできません。しかし、一つははっきり言えることは、主イエスを信じる者の集まりの中でこの事件が起きたということです。この事件

の判断を下したペテロ自身が、後に彼の手紙の中で次のように語っています。

なぜなら、裁きが神の家から始まる時が来たからです。（I ペテロ 4:17）

ここで彼が言っている「神の家」とは教会を表します。裁きは教会から始まる。ここで言われている「裁き」とは、必ずしも処罰の決定を指すことばかりではありません。教会の信仰が練られ、罪から聖められるために、時として厳しい試練が与えられる。もしアナニヤ・サピラの虚偽が見過ごしにされてしまったら、その後の教会の歩みには更なる悲劇がもたらされたことでしょう。神の聖が侮られ、嘘をついてもよい共同体として、甘く見られたかもしれません。神が偽善と欺きを見過ごされない方であるということが、教会の最初期において確認される必要があったのです。そして、神は今も変わらぬお方であり、私たちの群をも見守っておられるということを忘れてはなりません。

サピラは、夫が亡くなったということを知らない状態で、教会にやって来ました。ペテロは事情を伝えず、アナニヤに問うたと同じ質問を彼女にも投げかけました。彼女には、そこで真実を語るチャンスが与えられていたのです。悔い改め、本当のことを語ったとしたら、事態はまったく違う方向へと進んだことでしょう。しかし、残念なことに、彼女も夫とあらかじめ口裏を合わせていた。そして、偽りを語り、神の聖にふれ、命を落とすという結末に至りました。

本論3. ナダブとアビフ、アカン、ウザ

実は、今日の箇所と似通った記事が旧約聖書にも数カ所見られます。いずれも神の聖にふれて命を落とした人々であります。

①ナダブとアビフ

アロンの息子ナダブとアビフは自分の香炉を取って、火を入れて香をたき、命じられていない規定外の火を主の前に献げた。すると主の前から火が出て、彼らをなめ尽くし、彼らは主の前で死んだ。（レビ 10:1-2）

この二人は祭司アロンの息子であり、父親の跡を継いで聖職を司りました。しかし、彼らは主によって定められていた規定を破って祭儀を行なった結果、命を失いました。

②アカン

イスラエルの人々は、滅ぼし尽くすべき献げ物のことで背信の罪を犯した。ユダ族に属するゼラの子、ザブディの子、カルミの子アカンは、滅ぼし尽くすべき献げ物に手を出したので、主の怒りがイスラエルの人々に対して燃え上がった。（ヨシュア 7:1）

アカンは、主によって「滅ぼし尽くせ」と命じられていた戦利品の一部をくすね、自分の天幕の中の地面の下に隠しました。その結果、民全体に災いが下り、アカンの死をもってしなくてはその災いが去ることはありませんでした。

③ウザ

彼らは丘の上のアビナダブの家から神の箱を新しい車に載せ、運び出した。アビナダブの息子ウザとアフヨがその新しい車を御していた。《中略》だが、一行がナコンの麦打ち場にさしかかったときである。牛がよろめいたので、ウザは神の箱の方に手を伸ばし、箱を押さえた。すると主の怒りがウザに対して燃え上がり、神はウザが箱に手を伸ばしたということで、彼をその場で打たれた。彼は神の箱の傍らで死んだ。（サムエル下 6:3-7）

契約の箱が落ちそうになったのを押さえようとしたウザは、なぜ死ななければならなかったのでしょうか。それは、本来契約の箱に触れることが許されていたのはレビ人だけであり、ウザにはその権利が与えられていなかったからです。また、契約の箱の運び方も、規定の方法とは全然異なるやり方で実施されていました。この事件もまた、神の聖を侮る行為と見なされたのです。

これらの事件に共通している一つの事柄は、いずれも神が指定された方法に人間が従っていないということです。神はご自身の聖性を表すために、聖務に就く者に対して厳格な指定をお与えになります。人間の側は、注意深くそれに聞き従うことによって、神の聖を認めるのです。今日の箇所では、アナニヤ・サツピラ夫妻が何らかの意味で「神の方法」に聞き従わなかったと結論づけることができるでしょう。それは、献金に偽りが入り込んだという点から説明することができると思います。献金とは、私たちの心を神に表す行為でありますから、そこに嘘があってはいけないのです。

【結論】

今日の箇所は、教会に厳しいメッセージを与えています。しかし、教会がどのような場所であるかを思い起こすとき、それは当然と言えるのかもしれませんが。教会とは、聖霊が臨在される場所である。そこに属する者たちも「聖なる者」と呼ばれている。神の聖と常に背中合わせで生きているのがキリスト者であるということ、常に心に銘記する必要があるでしょう。私たちの人生そのものが聖霊の支配下に置き直され、自ら罪を憎み、真実に生きるべき者とされているということを、このペンテコステ礼拝において改めて心に留めたいと思います。

【祈り】

人の心を知られる聖なる神様。あなたの御前に出るとき、私たちは自らをよく吟味しなくてはなりません。すべてのことにおいて偽りなき存在になりたく願います。人に見えるところだけを整えるのではなく、あなたの目にどう映っているかに、常に気を配らせてください。私たちの生き方を聖めてくださる聖霊の助けを切に求めます。この共同体が、群れとしてあなたに喜ばれる存在であることができるように、導いてください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
旧約より、イスラエルの民にご自身の聖を現し給うた、父なる神の愛、
教会の内実を聖め、群れに属する者の生活を導き給う、主イエス・キリストの恵み、
あらゆる罪を憎み、神の御前に真実であらせ給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。